

これらの事からも上記の水平のときの、水液上昇の圓滑性が窺えるのではないと思われる。先端部が中間部より低滲透價を示し、高含水量を示す場合に單位乾燥量に溶存する滲透壓的に有効なる成分のモル數を第1表、第2表で示した。それを見ると一般に先端部の方が濃度は濃くなっている。これは吸水力の下から上への連続的な傾斜を示すものかも知れない。しかし全體として大きな差がないのは個體全體として殆んど一樣に滲透壓の有効物質と水分が行き渡っている事を示す。

今假りに吸水力が滲透壓と膨壓との差で示されるとし、吸水力が先端に盛んであるならば、ヘチマに関しては膨壓は先端部は中間部に比し非常に低くなければならない。風が多くの場合吹き、植物が凋萎を示す14時頃に先端から凋萎が起るのは、或はこの關係を示すのではないかと思われる。

モル數、吸水力の關係は尙將來生理實驗的研究が必要であると想ふ。

要するに日變化は中間部が大きく先端部は中間部に比し低滲透壓で、水液の上昇には幾分重力も影響することが窺える。

尙この實驗は野外で行われ然も個體差は無視して行われたが、これは誤差としては大した問題にならぬ程小さいものであることは他の實驗によつて確めた。

文 獻

- (1) Walter, H., Die kryoskopische Bestimmung des osmotischen Wertes bei Pflanzen. Handb. d. biol. Arbeitsmethoden, Abt. XI, 1931
- (2) Walter, H., Die Hydratur der Pflanzen. Jena. 1931

山本兩先生の御研究

縣下昆虫の雄、山本茂信（豊岡高校）山本義丸（柏原高校）兩君の活躍は實に驚異に價するものがある。

山本茂信先生は文部省より研究費を受け、自ら養父郡建屋村字町に試験所を設け、現代日本山林家の最も苦慮している、松喰虫につき、總ゆる角度から文字通り寢食を忘れて研究が進められている。即ち基礎研究の一部は寫眞に圖に膨大な報告物が記録されつゝある、その一部は昭和23年3月但馬生物2號に發表、同研究の完成を心から我日本の爲に祈るものである。

山本義丸先生は昆虫學者の暗黒面である、幼虫の研究に全力を盡されつゝあり、同君は生態畫の巧妙なること到底畫家の及ばぬ所で誰れをも一驚させずには置かない、即ち昆虫の特徴の一つ一つが能く画面に表れている、試みに次の雑誌を参照願いたい。

スバメガ科の幼虫（1~3）新昆虫第2卷1.2.3號（1949）

なお、本誌にもかくも立派な凸版が經濟的に載せられる日の來るのを、我學界のために祈ると共に會員諸氏の一層の御援助を願ひ度い。

擱筆するに當り、兩先生の益々御健康に留意され一日も早く完成されることを心から御祈りする次第である。（編纂子）

定藤、野草兩先生

今度、神戸市立楠ヶ丘高校、安藤保二氏は東京文理大、地質學教室の學生として見事難關を突破され、上京入學された、尙引續き御専門の貝類の研究に主力を注がれる由。

又神戸市立湊川高校、野草俊作氏は大阪府立新制大學に御榮轉、引續き生物學の講義を持たれる。（編纂子）